

# 新九郎通信



発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳  
メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

古澤進さんの「瑞雲寺の梅林」が曾我の瑞雲寺様に寄贈されることになり、ご遺族と納めに伺った。今年は寒く「梅は2月2日の梅祭りに咲きますか？」とご住職にたずねると「ま少しずれても咲くでしょう、去年は遅れて桜と一緒に見られるくらいでしたから、いいほうですよ。」大震災もあり自然に異変をきたしているのか。それでも季節は巡り、遅れても花は咲く。少々のことに右往左往せず、滔々と歩んでいきたい。

## 新九郎 2月の展覧会のご案内

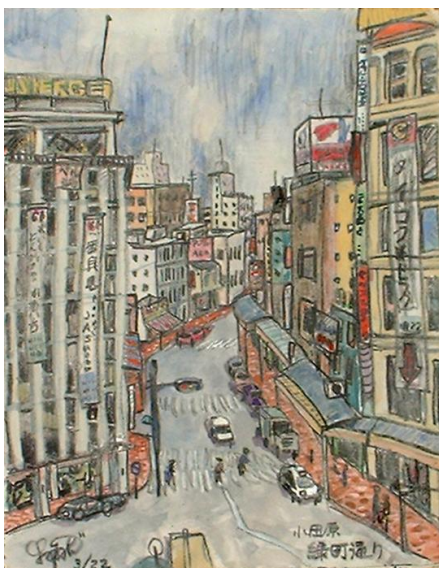
## 近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 1/30(水)~2/4(月) 第18回小田原市役所写真愛好会写真展	国内外の風景、人物、鉄道スナップ等、 会員8名、約40点
 2/6(水)~11(月) 第14回怪作展	小田高卒業生 OB/OG 展 若い方たちの感性が楽しい 油彩・水彩・写真・彫刻・4コマ漫画・織・金工・友禅染等
 2/13(水)~18(月) 第11回ななくさ会作品展 展一暮らしの中で楽しむ絵てがみー	結成22年「暮らしの中で楽しむ絵てがみ」をモットーに、11人の会員による展覧会
 2/22(金) 新九郎デッサン会	18:15-20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500円

会期・展覧会名	会場
1/9(水)~2/4(月) 新春 富岳展	お堀端画廊 0465-23-7819
2/13(水)~18(月) 縄井かつみ展	お堀端画廊 0465-23-7819
1/28(月)~2/3(日)文化交流会 作品展示発表会&チャリティ	飛鳥画廊 0465-24-2411
2/13(水)~17(日) ぐるうぷ碧・ちゃりてい展	飛鳥画廊 0465-24-2411
1/26(土)~2/16(土) すどう美術館コレクション展	すどう美術館 0465-36-0740
2/6(水)~10(日)西相展受賞者+市民写真会合同美術展	小田原市民会館 2F 0465-22-7146
1/26(土)~2/12(火) 河口邦山の似顔絵	クラフトえいと 0465-32-0188
1/11(金)~2/8(金)火休 足柄刺繍・上田菊明傘寿の業	ギャラリー城山 0465-30-2950
2/9(土)~17(日) 西静恵他 焼き物アルケミスト・ハルシラス	元麻布ギャラリー平塚 0463-22-7625
2/3(日)~3/10(日) 門間由佳展	相模原市民ギャラリー 042-776-1262

## 小田原街なみスケッチ

暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 岡田昌康  
第1回「小田原緑町バス停前商店街」



小田原駅ラスカの海側のエスカレータの踊り場には、大きな壁面ガラスが嵌められていて、駅前から郵便局へ向かう広い道路を、緑町バス停の辺りまで広々と俯瞰できる。ここからだけ見る事の出来る風景に感激し、描いてみた。

駅前広場の両側に立つ2つのビルの間から、道が海へ向って伸び、途中から緩やかに右折している。道沿いには、色とりどりの色彩の看板に彩られた建物が、低く、高く、続く。屋上から見えた海は、ここ4階からは、建物の陰になって見えな

い。路上には、駅から去る車、駅へ向かって来る車、止まって荷降ろししている車。信号が変わると渡り出す歩行者は豆粒のようである。

変貌しながらも伝統を纏った街並みの、真新しい光景である。

## 美術館展覧会情報

- 東京国立博物館  
140周年特別展「飛騨の円空-千光寺とその周辺の足跡-」  
1/12(土)~4/7(日) 月休館、1/14.2/11 開館翌日休館
- 東京都美術館  
[特別展]エル・グレコ展  
1/9(水)~4/7(日) 月曜閉室(但2/11開室2/12閉室)
- Bunkamura ザ・ミュージアム  
白隠 HAKUIN 禅画に込めたメッセージ  
~2/24(日) 会期中無休
- 永青文庫  
冬季展示「武蔵と武士のダンディズム」  
1/5(土)~3/10(日) 月曜休館(祝日は開館翌日休館)
- MOA美術館  
国宝「紅白梅図屏風」と所蔵琳展  
2/1(金)~3/20(水・祝) 木曜休館(祝日は開館翌日休)
- 埼玉県立近代美術館  
ポール・デルポー 夢をめぐる旅  
1/22(火)~3/2(日) 月曜休館(祝日は開館翌日休館)
- 根津美術館  
コレクション展  
新春の国宝那智瀧図 仏教説話画の名品とともに  
1/9(水)~2/11(月・祝) 1/15.1/21.1/28.2/4 休館

赤いマニキュアにピアス、栗毛色の髪がよくお似合いな素敵な女性が出迎えて下さった。秦野市南ヶ丘、桜並木が美しい高台の住宅街である。玄関を入ると目の前に明るく広いアトリエが飛び込んできた。まるでアトリエで暮らしているようなお宅である。ご案内いただいたリビングからは、見事な桜並木が見える。向かいの小学校から聞こえる子供たちの歓声が心地よいリビングで、「怪作展」の主宰をされている佐々木美直子さんにお話を伺った。



今年で14回目を迎える『怪作展』は、佐々木さんが勤務する県立小田原高校美術部卒業生を中心とした展覧会である。インパクトのある展覧会名は、「奇怪」の怪であり、1年に1回皆でやるの「皆」でもある。参加者は、現役の美大生、院生から小説家、学芸員、デザイナー、絵本作家、プロの作家まで、年齢も仕事も住まいも様々になった仲間たちが、1年に1回互いの作品を見合う切磋琢磨の場なのだという。主宰と言っても会の運営はすべてお任せで、佐々木さんはもっぱら学校現場での広報を担っている。進学校であっても、生徒たちの美術に触れる経験の少なさを実感することは多いという。本物の絵を見せること、大人になってからでは簡単に育たない感性や人間としての幅を広げてほしいという思いから、作品展には会場に足を運ぶよう声をかけ続けているという。

1年に1回会場に出会う作品は、そのまま生徒たちの今を知ることのできる楽しい場であると同時に、作家としてとても刺激のある場になっているという。新九郎での開催は今回が3回目となる。文化祭的なノリで始めたホールでの展覧会から、プロの方にも見てもらえる画廊での発表には、佐々木さんの「チャレンジする場であれ」という熱い思いが込められている。参加者の真摯な受け止めは、作品や気構えにも生きていることを感じるという。今年も15名の作家が出品する。若い作家たちと恩師のチャレンジし合う姿を、一人でも多くの方に見てほしい。

人間関係が希薄になりつつある時代にあって、生徒との素晴らしい関係を続けていくのには、教育者としての並々ならぬ努力と、作家として常に一步前を行く存在として歩み続けている方なのであろう。もちろん人としての魅力を生徒たちは敏感に感じ取っているはずだ。

「小田原映画祭」では、第5回からポスター原画を近隣の高校生から募集をしてきたが、採用作品は2年連続で小田原高校美術部だった。指導のポイントを伺った。生徒たちも多忙な学校にあってポスター作りは年間の活動計画に組み入れ、初めにアイデアスケッチを見て、あとは適宜アドバイスをするとのことだった。また、神奈川県高校芸術祭にも参加し続け生徒には50号という大きな作品にチャレンジさせ受賞歴を重ねている。ここにも、「個性を大事に」「チャレンジすることの大切さ」を身をもって伝える作家としてのポリシーが生きていた。

佐々木さんは、常に全力投球で生きてこられた方だった。中学校での専任を皮切りに、10年間の子育て時代、ご主人の転勤での渡米生活、作家と教員の仕事を持ちながら親の介護に明け暮れた時

代を自身の『芸術上の氷河期』と例えられたが、どんな中にあっても自分を見失わないために絵筆を持ち続けてきた。

最愛のお母様の介護を通し、「生と死」という避けて通れない重いテーマを突き付けられたという。どんどん自由を奪われていく愛する人を見ながら、どうにもできないことがあることを知り「いい世界を生きてほしい」と願いながら自分もより良い『いい世界』を生きなればと感じたという。

今年3ヶ月展を5年ぶりに開催する。アトリエには描きかけの大作が何点もかかり、精力的な仕事の様子が伝わってきた。丁寧に下地の作られた画面からは、モノトーンでありながら様々な色が感じられた。細かな筆使い、時間の経過を感じさせるひびわれ、少し離れてみると穏やかな山羊の姿が現れる。目をつむり思考しているような、微笑んでいるような、見るものにゆだねられた画面からは、安堵のような穏やかさが感じられた。

佐々木さんのテーマモチーフでもある山羊は、人間との歴史も深い動物であ



る。形、角、目・・・愛らしい、強くない動物の代表ともいえる「山羊の目」を通し描いてきた精神世界は、「TO THE NEW WORLD」のタイトルのように、どんな新世界を見せてくれるのか今から楽しみに待ちたい。

【新九郎友の会 木下和子】

一月のこと

1月3日妻と久しぶりに帰宅した次男とで「シャルダン展―静寂の巨匠」を見る。会場の三菱一号館(2024年)は英国人建築家ジョサイア・コンドルの設計になる洋風事務所建築だ。この建物は老朽化のため解体されたが、40年あまりの時を経て、原設計に則って同じ地に美術館としてよみがえった。外観は瀟洒な3階建ての赤レンガで、内部は小さな部屋がいくつもあつた。ホワイトキープの美術館と違いヨーロッパの美術館で見られるような落ち着きがある。

シャルダン (1699-1766) は静物画と風俗画で知られる。同時代のフランスの画家では、ヴァトール、フラゴナール、ブーシェがいる。ロココ様式の華やかで甘美な絵の画家達である。シャルダンの絵は褐色・グレーを基調にして派手さはないが、入念に塗りこまれた画面は静寂で、色彩の美しさが際立つ。

銀製のゴブレットはどのように描いているのだろう。近づいて見る。プルツシャンブルー、グレー、ホワイト、セピア・微妙な混色と絶妙な筆裁き、離れて見れば銀色だ。「錫引きの銅鍋」は構成が堅固でモランディを思わせる。台所の片隅に銅鍋、陶器の片手鍋、卵、胡椒入れ、ポロネギが配置されているだけのシンプルな絵だ。そこにはなんの物語もない。写実であるが、いわゆるトロンプリーユ(だまし絵)的にそっくり描かれているのとは違う。実在感を描いているのである。240年前シャルダンはこの台所に立ち、鍋と野菜を描いていたのだ。使い込まれた銅鍋の赤銅色は本当に美しく、凸凹の質感は眼に触れるようである。「羽を持つ少女」はまだ幼い少女がラケットと羽根を持ち遊ぶようにしているところだ。羽の紺色、紅い頬、乳白色とブラウンのエプロン、腰帯のブルーと針刺しの赤がなんとも美しい、ハーモニーを奏でる。少女は紙粘土で作ったお人形のようにもあるが、その軽く笑みを湛えた表情は愛らしく、少女を永遠のものにしていく。

シャルダンは「ここに描くべき対象がある。それを正確に描くためには、私は見たものすべてを、さらに他の画家たちがそれらを描いた方法までも忘れなくてはならない。」と言っている。絵は美しいと感じる心と、他人ではなく自分の目で見て描くことが大事なのであろう。

素晴らしい絵を堪能したあと、中庭にあるカフェでケーキセットをいただいた。中庭は緑の中にムーア等の彫刻が配され、カフェや雑貨店が並びゆつくりとくつろげる空間になっている。至福の時間を過ごせた良い正月であった。④